

7 ボランティア

主婦ネットが原動力

一年に一度、いわき市で「骨髄バンクを支援するつどい」が開かれる。毎年千人を超える市民が訪れ、たった一日で二百万円から三百万円を売り上げる。

イベントの中心は同市の主婦、斎京子さん^(四)。斎さんの夫は、自ら骨髄液を提供したことのある、いわき市立総合磐城共立病院の血液内科医師、斎敏明さん^(五)。しかし、「イベントを通じた夫との連帯感？一切ありません。私が始めたのは、あの一言があったからです」と言い切る。

あの一言とは、この連載でも紹介したが、県骨髄バンク推進協議会運営委員長の陽田秀夫さん^(五)の妻で白血病と闘った茂子さん^(四)故人^{II}が、一九九〇（平成二）年に公的バンク設立運動のシンポジウムで発言した、「私の体には時限爆弾が仕掛けられています」という言葉だった。

斎さんはその日、手伝いで会場にいた。そして茂子さんの言葉に大きなショックを受ける。「茂子さんは私よりも若いけれど、同じ主婦で子どもが二人いる。私にも

何かできることがあるのでは」。茂子さんの呼び掛けが、眠っていた京子さんの情熱に「カチツ」と火を付けた。

主婦ネットワークを通じて話が

どんどん広がった。やがて、いわきの骨髄バンク運動を全国でも知名度の高いものに押し上げる原動力にさえ発展する。現在は六人の主婦が中心になつて活動している。

イベントが年々

盛り上がるなかで、斎さんは茂子さんと永遠の別れを繰り返した。そして斎さんは「たくさん

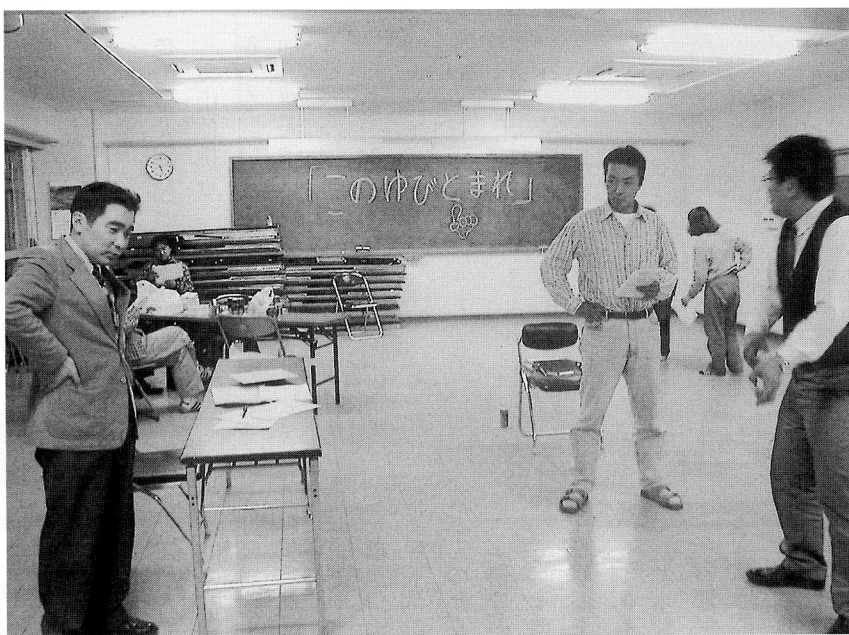
さんの出会いがあり、いろいろなことを感じられるようになった。ボランティアは特別な

人の活動ではないことを痛感しています」と語る。友人が斎さんの中に

残してくれた大切な「何か」が、大きなバンク運動に

つながっている。もう一つのボラ

ンティアが今年の三月五日に原町市で開かれる。原町



「いのちのボランティア事業」での上演に向けて練習を行う原町J.C.のメンバー

ドナー登録推進に講演会や創作劇も

青年会議所（西内清祐理事長）設立三十周年を記念した「いのちのボランティア事業」で、骨髄バンク登録などを訴える。

「これまでの活動の集大成だが、OBとなった金子さんと陽田さんの熱意に動かされたところが大きい」と担当で原町市で飲食店を経営する水口一八さん^(三)。

金子さんとは、鹿島町で写真館を営む金子洋一さん^(四)のこと。

金子さんは青年会議所の活動を通して陽田さんと知り合い、相双地区でのドナー登録推進を目的とした講演会を開いたこともあった。

今回のボランティア事業でも、創作劇の脚本を書いた。

「骨髄バンクに登録した家族を舞台に、善意の在り方を問い、問題を提起したい」と語る。劇には市民劇団「駒座」の団員のほか中高校生も出演する。

会場では、骨髄バンクの登録や献血が受け付けられる。「日ごろ、機会のない人たちも日曜日なら来てくれるのではないか」と水口さん。登録拡大に期待を寄せる。